

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科 人間関係学 専攻		
指導教員	所属・職名		氏名
	コミュニティ福祉学部 コミュニティ政策学科・教授		佐藤 研 印
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	『使徒行伝』十章にみる最初期の異邦人伝道		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	コミュニティ福祉学研究科 人間関係学専攻 修士2年		山吉 裕子 印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	同上		同上
研究期間	2006年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

「ペテロとコルネリウス」(使 10,1-11,18) は『使徒行伝』の中で最も長い物語である。異邦人が福音を受け入れたことを初めてはっきりと描いたこの物語をルカがいかに重要視していたかということがうかがえる。本研究はこの物語を編集史・伝承史的に分析することによって、最初期の「ユダヤ教イエス派」の実態に迫ろうとするものであり、彼らがユダヤ人と異邦人からなる共同体をどのように作り上げようとしたのか、その一側面を明らかにする。主に検討される点は以下のようなものである：ルカによる編集・意図、伝承の担い手・意図・流れ、史実とそれが原始キリスト教の歴史において持った意味。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[原始キリスト教] [使徒行伝] [エルサレム原始教会]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. ルカによる編集

全体的にルカによる編集の手が加わっているが、特に以下のような箇所はルカの手によるものと考えられる：コルネリウスの性格付け（ルカ 7,1-10「百人隊長の僕の癒し」参照）、ペテロ演説（10,34-43）、11,4-18（ペテロ視点での物語の反復と全体の締めくくり）。

2. 伝承

ルカによる創作である可能性が極めて高い 10,34-43（ペテロの説教）を除くと、一連の物語には「ペテロの幻」と「コルネリウス物語」という伝承が含まれていると考えられる。この二つの伝承の関係性をめぐってはこれまで様々な議論がなされてきているが、まとめると次のようになる。

- ①もともとひと続きの伝承であった。
- ②それぞれ個別伝承であったが、ルカ以前にひと続きの伝承としてまとまっていた。
- ③それぞれ個別伝承であったものを、ルカが編集によって繋ぎ合わせた。

2.1. ①説の検討

ここで問題となるのは二つの物語が有機的に結合していると言えるかどうかである。Löning も Roloff も共にコルネリウスの幻とペテロの幻は「二重の幻」という型に則っており、最初から結びついていと主張する（『使徒行伝』9章「サウロの回心」参照）。しかしながらコルネリウスの幻と対応しているのは正確には“霊”の指示であり（10,19b-20）、ペテロの幻自体はコルネリウスの幻の内容とは全く関係がない。Löning は 20 節の *diakrino, meno* を「ためらわずに」ではなく「（幻の意味を）明らかにしようとせず」と解釈するべきであると主張する。そしてこの語を含む“霊”の指示が伝承にさかのぼると思われることを根拠に、二つの物語は元々不可分に結びついていたのだとするが、その訳では *o[ti* 以下と論理的につながらない。

また 10,17 と 10,19 にペテロの思案が重複していること、10,28f. に矛盾が含まれていること（28 節はペテロの幻の解釈。しかしペテロがコルネリウスの元に赴いたのは幻の意味が分かったからではなく、“霊”に指示されたからである。）などから、二つの物語は元来個別伝承であったと考えられる。

2.2. ②説と③説の検討

伝承の流れを検討する前に、まずそれぞれの伝承の意図・担い手などについて見ていく。

2.2.1. ペテロの幻

ペテロの幻は食物規定の根源的な廃止、すなわち食物規定はもはや人と人とを隔てないということを宣言している。清い動物と清くない動物が渾然一体となっているイメージがユダヤ人と異邦人との混合共同体の状況とぴったり合うことから、ペテロの幻は最初からユダヤ人と異邦人との関係についての伝承であるとも考えることも出来るかも知れない。しかしながらこの物語は空腹・食事の準備（10,10）、「屠って食べよ」（10,13）、「清くないものは食べたことがない」（10,14）などに見られるように、「食べること」に重点が置かれている。また「屠って食べる」（10,13）という表象は人間の関係のことを比喩的に指すにはそぐわない。

ユダヤ人のみ、あるいは異邦人のみから成る共同体では食物規定について問題になることはなかったであろうから、伝承の担い手はユダヤ人と異邦人の混合共同体であり、共同生活を困難にする一つの要因である食事に関する問題を解決するために用いられたのであろう（食べてよいものの種類を問題にしており、食べ方を問題にした使徒教令とは関心が異なる）。思想としてはかなりラディカルであり、マコ 7 章、ロマ 14 章に似る。「神が清めたものを」（10,15）は、神自身が新たな認識をもたらしたのだという宣言であると共に、自分たちが勝手に決めたのではないという弁明にもなっている。

研究成果の概要 つづき

2.2.2. ペテロとコルネリウス

注目すべきは物語の主導権を握っているのがコルネリウスでもなくペテロでもないことである。彼らはそれぞれ天使と“霊”の指示に、何が起こるのかも知らないまま従った。それは彼らの敬虔さを示す一方で、この出来事は自分たちの意志によるものではないという弁明でもある。この伝承を伝えた集団もまた異邦人とユダヤ人から成る共同体であり、Dibelius の言うように「単純な回心物語」としてでも、Trocmé の言うようにカイサレア教会の起源を語る物語としてでもなく、自分たちの共同体の在り方を正当化するものとして語り伝えたのであろう。

2.2.3. 伝承の流れ

この二つの伝承はどのような経緯を経てルカの著作に取り入れられたのであろうか。ルカ以前に結びついていたとする Jervell は根拠として両伝承にペテロという人物が登場することを挙げる。もちろん伝承の結合を促す一つの要因にはなるであろうが、それだけを根拠にルカ以前にルカと同じような関心で伝承を結び付けた集団がいたのだと断定している Jervell 説は説得力に欠ける。もちろん『アリストテアスの手紙』に見られるように、食物規定の比喩的解釈というのはルカの専売特許ではないし、ペテロの幻の解釈ともなっている 10,28 は、言葉遣いが特にルカ的であるというわけではない (avqe, mitoj, avllo, fuloj, prose, rcomai, dei, knumi など)。しかしながら二つの伝承の結びつきにルカの意図との差異が見られないのであれば、ルカ以前の段階を確実なことと想定するのはやや勇み足であると言えよう。したがってルカが編集によって二つの伝承を結び付けたとするのが妥当であろう。

3. 史実と原始キリスト教史における位置付け

カイサレアに由来するであろう「ペテロとコルネリウス」は恐らく実際のペテロの記憶にさかのぼるものであろう。Lüdemann はこの出来事を 33/36 年 (パウロのペテロ訪問) と 48/51 年 (エルサレム使徒会議) との間に起こったと想定する。しかしながら 39 年のカリグラ帝によるエルサレムへの像建立未遂事件、またアグリッパ 1 世によるエルサレム教会迫害後、主の兄弟ヤコブの指導の下で保守的傾向を強めていったエルサレム原始教会では、「当局から目を付けられている有力者」ペテロによるこのような振舞いは難しかったであろう。実際アンティオキア衝突事件の際にはペテロはヤコブの側についている。したがって出来事としては 30 年代のことと考えられる。伝承の成立時期についてははっきりしたことを言うのは難しいが、異邦人共同体の存在が当たり前になった 70 年以降は「異邦人とペテロの接触」、「異邦人への聖霊降り」が伝承として語り伝えられるほどの強い印象を持ちえないだろう。従って 70 年以前と考えられる。

「ペテロの幻」は現在の文脈ではヨッパと結び付けられているが、どこに由来するのか確実なことは言えない。またペテロが実際に見た幻かどうかも定かではない。しかしながら幻というのは内容もさることながら受け手が誰であるかも非常に重要である。内容の正当性を主張するためには、幻を見るのはどこかの誰かではなく、権威ある人間でなくてはならない。したがってそもそもペテロの名前と結びついた伝承であったことは充分考えられる。ペテロが律法に対して (常に一貫してではないものの) 寛大な態度をとっていたらしいことはガラ 2,11-14 からうかがえよう。伝承の成立時期は、やはり 70 年以前であろう。パウロ思想との共通性がうかがえるラディカルな思想である。この伝承を伝えた集団は、アイデンティティの一部である食物規定を異邦人にも強制するのではなく放棄する道を選び、それによって新たな関係を模索しようとした。「ユダヤ教イエス派」のユダヤ人信奉者たちにとっては非常に厳しい決断であったはずである。しかしながらこのような共生の仕方というのは、強大な軍事力を持つ国が他国に対して武力をもって武装解除を迫り、平和をもたらすのだとうそぶく現代にあって、我々に大きな示唆を与えるものと言える。

※ この (様式 2) に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書 (A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式) を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ④ 日本聖書学研究所 2007年3月例会発表
(2007年3月12日、文京区小石川 2-17-41 富坂キリスト教センター2号館)
「原始キリスト教運動の最初期における共生の試み
～『使徒行伝』10,1-11,18の編集史・伝承史的研究～」